リコー 三愛グループ

San-ai

秋 1971 No.68

特集＝生涯教育

イラスト・エッセイ

人間森林

真鍋　博

頭のイイ人の脳は大きいという。天才の脳は重いという。学者や宗教家――頭をつかった人の脳にはシワが多いらしい。

サルは人間よりも毛が三本少ないといわれるのは、きっとシワの数が少ないという意味のことなのだろう。

脳の大きさやシワ――人間の頭脳力はしばしば樹の年輪にたとえられる。

年を経た樹は年輪が多いし、年輪のシワも、木の幹のシワもよっている。つまり、木の株にいつも人間能力のイメージをわれわれはおきかえるのだ。つまり、大きいほどいいのである。

しかし、その木が死に絶えて、ただ腰かけるだけのためにはもちろん大きいにこしたことはない。しかし、テーブルや椅子にだけつかうならともかく、樹が生きていくためには年輪の数や断面の広さが問題ではない。

つまり、そこからまた如何に新しい芽を出し、枝をのばし、葉を繁らせ、鳥を集め、木陰をつくるかが問われるのだ。

樹の幹にはこうしてあらゆる時点での生き生きとした生体活動の営みを問うくせに、人間の樹は、年輪さえ重ねれば、それはそれで一生通用するとだけ思われている。だから教育とは、若い時に受けるもので、知識や思考が一生通用するも

のだと信じて疑われない。

だから大学出というたった四年間の年輪が社会で通用する。

人生七〇年のうちのたった四本の線で人間の能力がはかれるはずはない。まさに頭脳の化石である。

だから、時間の止まった遺物の人間の林がひろがっていく。ここには風もなければ、歌も生まれない。音がするのは落葉の音だけである。

人間の樹は、一生脳細胞と知的欲望とその欲びと細胞分裂を貪欲につづける—とどまるところを知らない樹である。

植物森林の樹は、高さや大きさの成長限点をもっているが、人間森林は生涯教育の土壌のあるかぎりとどまるところを知らない。〝ジャックと豆の木〟の天までとどく成長はこと植物学に関する限り非科学だが、人間の能力と才能に関する限り科学的である。

植物は熱や光や水や酸素を必要とするが、人間の樹は時代を呼吸して伸びてひろがっていく。

一本の木が、一本で育つより、植林森林で群生してこそ成長の度を増すように、人間の樹もコミュニケーションの群生によって、より高度高質な人間森林を形づくることになるはずだ。

そしてその森林は、動かぬ固定森林ではなく、いつも風が吹き抜け、陽が輝き、さわやかな葉音がひびく。

生涯教育は、森林育成のための必須栄養源であり、固定森林防止の手段でもある。

（イラストレーター）